



【はったぎはたし】で機織り再現

平成15年1月17日に国の文化審議会の答申を受けて、民俗資料館所蔵の生産関係用具1,345点が国の重要有形民俗文化財に指定されることが決まりました。

指定にあたっては、資料そのものの価値に加えて、村文化財調査委員による昭和30年代からの地道な調査活動、詳細な聞き取り調査によるバックデータや緻密な実測図を整備したことが評価されました。今後は生活用具や信仰資料についても、村の歴史を語る重要な資料として、同様に整備を進めていきます。また、追加指定を目指して資料収集や聞き取り調査を続けていきますので、今後とも変わらぬご協力をお願いいたします。



産物について聞き取り調査



むくき製糸の風景



資料館別冊の校字



資料館別冊の校字

国指定重要有形民俗文化財

北上山地川井村の
山村生産用具コレクション

【指定までの経緯】

- | | |
|-------------|---|
| 昭和32年~平成3年 | 村内民俗資料所在調査 |
| 平成4年度~6年度 | 資料収集活動 |
| 平成6年11月 | 川井村北上山地民俗資料館オープン |
| 平成7年度~ | 実測図製作、館務実習聞き取り調査の開始 |
| 平成11年度~13年度 | 国庫および県補助を受けて、資料台帳カードの整備開始(申請に係る作業は14年11月まで) |
| 平成14年11月 | 申請資料の提出 |
| 平成15年1月 | 文化審議会答申 |
| 平成15年3月 | 官報告示、指定書の交付(予定) |

謝辞

昭和30年代からの長きにわたり、民俗資料の調査にあたってこられた村文化財調査委員の方々、開館以来、運営にご指導いただいた資料館運営委員の方々、申請作業のうち最も大変な実測図の製作をご指導下さった岩手大学の名久井芳枝先生(当館名誉館長)、実測図の製作に協力して下さいました岩手大学博物館学OB、OGの皆様、館務実習の過酷な環境の中、聞き取り調査にご尽力いただいた同大博物館学担当講師である名久井文明先生と実習生の皆様、申請作業にあたって様々なご指導、ご助言を下さいました文化庁大島暁雄調査官を始めとする諸先生方、そして何よりも、民俗資料館に資料を寄贈して下さいました村民の皆様、聞き取り調査や資料復元に協力して下さいました村民の皆様、この場をお借りして、心から敬意と感謝の意を表する次第です。

川井村北上山地民俗資料館館長 渡邊満夫(川井村教育委員会教育長)

探しています

資料館では昔の暮らしの様子を伝える写真資料を探しています。写真は、思い出の品としてそれぞれのご家庭で大切に保管されていることと思います。寄贈していただけない場合でも、お貸ししていただければこちらで複製いたします。ご協力お願いいたします。

花嫁衣装



松田照男様
サキ様

写真は昭和39年頃のもので、さんがまとっている花嫁衣装、いったいどのような歴史を持っているのでしょうか…

この花嫁衣装は、鈴久名農協婦人部が地域の娘さんたちのために用意したものです。以下、婦人部解散後にこの衣装を管理しておられた佐藤せきさんによる解説文を要約して紹介します。

佐藤さんは、活動を振り返って次のようにお話ししてくださいました。
「昭和36年からこのお振袖を着た何人もの花嫁さんを送り出しましたが、喜んで利用してもらったように記憶しております。この花嫁衣装は私たちの活動の原点でもありました。『ものに対する思い入れの気持ちが強いと、そのものに魂が宿る』といいますが、この衣装に対していただく私たちの気持ちはまさにそのとおりです」

展示を見た来館者からは次のような感想が寄せられています。
「…農協婦人部の人たちが作った花嫁衣装、すてきでした。そのために働いた人たちもすごいと思いました」
「花嫁衣装の説明にジーンとききました。手仕事というのが今ではほとんどなくなってしまっていて、そこまで物を大切にすることは今あまりないのではないのでしょうか」

紹介した花嫁衣装は、平成12年に鈴久名農協婦人部が解散して、個人で管理を続けるのがむずかしくなったため、資料館に寄託されることとなりました。資料館では、装飾品や写真をあわせて5月連休まで展示する予定です。

その後、地域の人々の思いを伝える大切な資料を光や虫害から保護し、保管する予定です。



昭和26年、鈴久名地区に振袖姿の花嫁さんのお嫁入りがありました。当時の花嫁衣装は髪結いさんから借りた留袖が一般的でしたから、きらびやかな振袖姿の花嫁さんは、大変話題になりました。そうして鈴久名から嫁ぐ娘たちに振袖を着せてやりたいという地域の人たちの願いを当時発足したばかりの鈴久名農協婦人部が引き受けることとなりました。揃えた衣装は振袖、長じゅばん、白無垢の3枚一式です。

- 絹布の工面
ほとんどの家庭で養蚕を行っていたので繭を持ち寄り、繭5貫400匁(20.25kg)を準備した。昭和35年当時、繭1kgの取引単価400円、女子の1日の労働賃金が200円だったことを基に計算すると、一人が40.5日働いた賃金に相当。
- 工賃の工面
染め賃、縫い賃には現金が必要だった。当時、造林が盛んだったので、下草の刈り払い作業や植林作業に出たり、自主的に空き瓶回収作業をし、きのこの瓶詰めや沢庵漬けを委託販売して現金を得た。

川井村の文化財 ② 村指定有形文化財第2号～5号

「銅梅花双鳥鏡」「銅亀甲地双鳥鏡」「銅菊花散双鳥鏡」「銅蓮菜鏡」
これらは、巢内家に先祖代々伝わる「古鏡」4面です。このうち1面は、巢内家旧墓地上方の氏神・熊野神社の境内から出土したものです。現在、これらの鏡の由来と、明徳4(1393)年正月附の南北統一の翌年奥州探題となった葛西満清の辞令原本との関係を探っています。

川井村文化財調査委員 巢内亥十二(所有者)

「銅亀甲地双鳥鏡」
なお、「銅蓮菜鏡」は民俗資料館に展示されています。

14年度の入館者数(4月～1月) (人)

一般	学生	児童生徒	団体	免除	
				公用	合計
638	9	44	391	568	1,650

14年5月からの図書館バスの運行に合わせ、村内小中学生の入館料を無料にしました。これによって、学校の授業以外にも資料館に勉強しに来てくれるお友達が増えました(のべ266人)。

ふるさと学園「資料館冒険体験塾」 ミニえつこ、ミニほうき作りに挑戦

1月17日開催された資料館冒険体験塾には14名の小学生と祖母が集まり、ミニえつこ、ミニほうき作りに挑戦しました。昔ながらの技術を教わり、今も使えるものを作るのが目的です。えつこ作りを教えてくれたのは、榊原市男さんと関口ハルさん、ほうき作りは佐々木イセさん、山名シノ子さん、高屋喜多男さんです。

思ったよりも力を必要とし、作業も細かく、同じ姿勢を長時間とっているため、参加した子どもたちは、時間が経つにつれ「疲れた」「足が痛い」などと不満を洩らしはじめたのですが、講師の方々が、根気強く親切、丁寧に指導してくださったおかげで、何とかミニ版のかわいいえつこ、ほうきが完成しました。ほとんど手をかけてもらったとはいえ、自分で作った作品を手に、自分なりに装飾し、早速使用してみても嬉しそうでした。

(「ふるさと学園」担当 佐々木町子)



えつこ作りの様子



ほうき作りの様子

〇わらで作るミニえつこは、わらが手や指にたくさんささったけれど、きちんとしたえつこが作れたのでうれしかった。今日は先生といっしょに作ったけれど、今度は一人で作りたかった。きかいがあればまた作りた。はじめは「ふくごつな作りかなあ」と思ったが、いがいにわかりやすく、作りやすかった。(泉沢咲さん)

〇ほうきを糸で編むとき、キミが折れたりして大変だった。同じしせいをとって肩や腰がいたくなった。(佐々木裕弥君)

ボランティア 募集!!

平成15年4月から…

●実測図を描いてみませんか?
「実測図講習会」

平成15年5月～12月

対象 川井村民

期日 毎月第2火曜日を予定

講師 名久井芳枝先生(当館名誉館長、著書『実測図のすすめ—モノから学術資料へ』)

一開館以来、「資料紹介」でも使用している実測図の作製に力を入れてきました。この講座は民俗資料の記録作業である実測図の作図者を養成するのが目的です。実物を計測しながら方眼紙に描きます。絵心がなくても大丈夫です!

●「資料館協力員」

- ・冒険塾などのお手伝い
 - ・来館者への展示解説
 - ・資料整理など作業のお手伝い
 - ・資料復元、レプリカ作製等
- 古文書に興味がある方、整理作業が好きな方、実測図を描いてみたい方、ぜひ資料館でその特技を活かして下さい。ご協力をお願いいたします。

申し込み、お問い合わせは…
民俗資料館(役場) TEL 76-2111

館務実習生の受け入れ

岩手大学の博物館実習生36名と食文化伝承講座の受講生が交流しました。実習生は「道又の畑」などでヒエ



雑穀畑の見学



ソバ打ち体験の様子

やソバの生育状況を見学してから、伝承講座受講生に教わりながら、「蕎麦きり」などの郷土食作りを体験、試食しました。

実習生には3日間の日程で資料整理や聞き取り調査に協力していただきました。館務実習生の受け入れは今年度で8年目となります。

この他、下閉伊管内出身学生が学芸員資格を習得するための館務実習も受け入れています。8月19日から7日間、東北学院大学の中村淳一さんが資料整理などの実習を行いました。

実習生から次のような感想が寄せられています

「寒冷な地方に適したソバ、アワ、ヒエやキミなどの雑穀類が昔の生活では貴重な主食となっていたということだが、そうした雑穀類をおいしく食べるための知恵として、「とろろ(ミズとろろ)」などが多く食されるのだということに気付かされた。また、ミズひとつとっても、その根から茎まで無駄

にすることなくそれぞれの部分に合った調理法を駆使することで、食生活を豊かにすることができるという生活の知恵を学んだように思う。このような人々の生きる知恵を後の世代に伝えていくことも博物館の重要な役割の一つなのだろうと感じた」

(岩手大学人文社会科学コース 森川真理子さん)

編集後記

一昨年から「食文化伝承活動講座」の皆様活動を記録させていただいております。少しでも畑仕事のお手伝いができればと思い、去年、鍬と鎌を購入しました。でも、いざ畑に出てみると…何とも適さない鍬を選んでしまったらしく、全くお役にたてませんでした。今年も春が近づいてきました。また鍬探しをしなくては。(安藤)

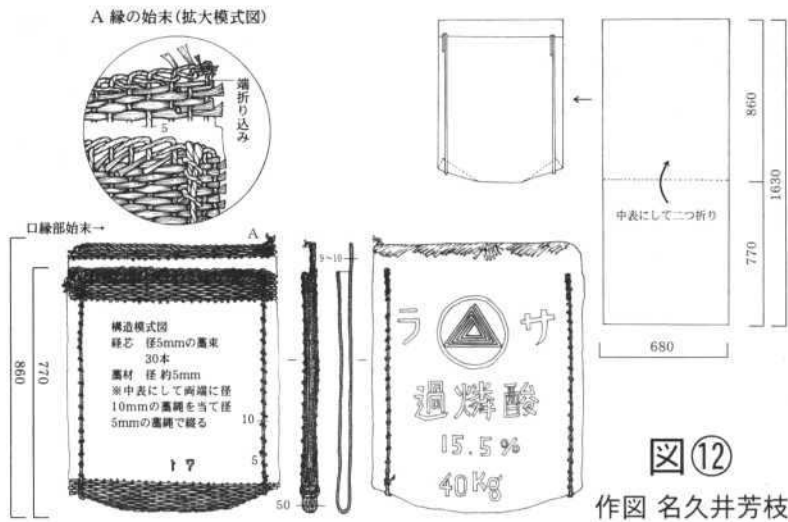


図 12

作図 名久井芳枝

伝票番号 1197
 資料呼称 かます
 寄贈者 藤岡富次郎氏
 収集者 芳門留次郎氏
 話者 藤岡富次郎氏
 材用者 藁
 使用方法 家族で使用していたが主に男性ヒエ、アワ、ダイズなどの穀物(こくもの)を入れて運搬するために使用した。保存のためには短期間しか使用しない。
 備考 話者の父親は明治生まれであるが、[かます]を製作したことがある。この[かます]には「ラサ工業」のマークがついている。これは肥料を購入し、それを穀物運搬用に使用したのだろうとのことである。
 聞き取り 田原りょう子
 重 量 1,770g

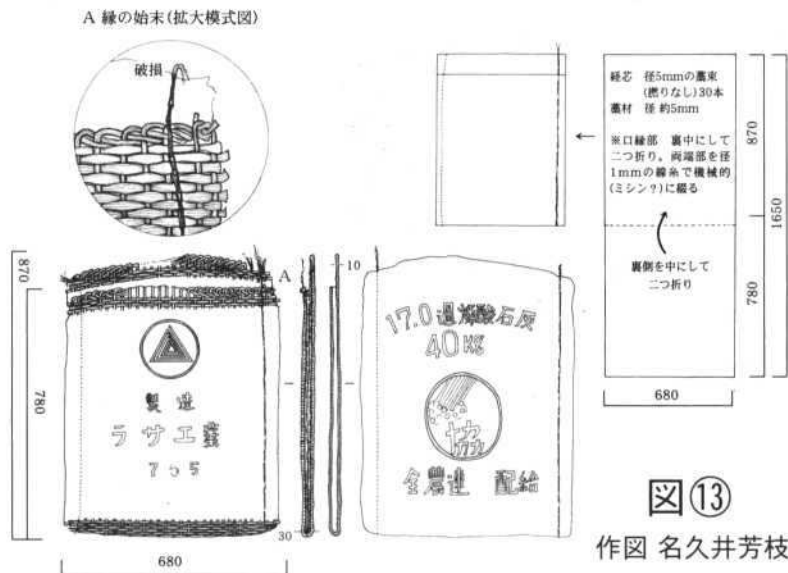
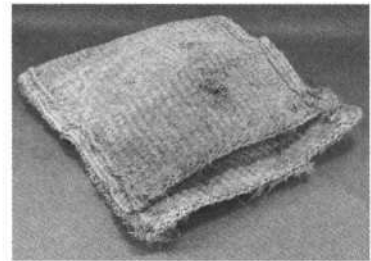


図 13

作図 名久井芳枝



伝票番号 2763
 資料呼称 かます
 寄贈者 中井義雄氏
 収集者 石曾根勝雄氏
 重 量 1,570g

「もの」の表情は個性的 名久井芳枝

「かます」は穀物の運搬や短期の保存に活用されたが、「塩かます」や「銭かます」としても製作されていた。今回紹介する資料は化学肥料の運搬に使用され、更に転用して穀物や木の実を運搬する袋としても使われた。「かます」が先人の暮らしの必需品であったことは、川井村以外の地域でも耳にする。しかし案外に実物が残っていない。「かます」がなければ生活ができなかった：うちのかますも見当たらない。これは素材が脆い上に焚き付けにもつてこの性質だったため、多くの「かます」が熱エネルギーとして人間に貢献し、その役目を終わったからである。身近な必需品ほど残存率が悪いということ、この資料は実感させてくれる。

「かます」は基本的に藁や「ミヨウガから」製の藁を二つ折にして綴った袋のことで、どれも一見したところ同じように見える。しかし手製ゆえに一点毎に表情は異なっている。例えば実測図で示した二例には口縁部の始末と綴り方に相違がある。図⑬は大量に生産されたものか、ミシンで綴られ口縁部は内側に折り返されている。図⑫は伝来の手法で縄を絡めて綴る丁寧な仕事である。重量も図⑬より重く丈夫である。口縁部は外側に折り返されているが、これは中に入れる穀物その他を無駄なく出し入れするのに好都合の配慮だったと容易に想像できる。この資料は、大量生産品で間に合ったかもしれない用途の「かます」に、作り手のこだわりと人柄を刻み込んで個性的である。この2例の技術の分析で、従来の手作りの世界から工場製品へ移り変わる過渡期の様相を垣間見ることが出来る。このような事実は同種類のものが沢山集まって始めて解る事である。

当資料館には、村民の皆さんのおかげで、北上高地に懸命に生きた人々の情報がうず高く集積されている。それらが「国の宝」として価値を認められた。今後、皆さんと共にますますその内容を充実させ、未来へしっかりと伝達していきたいものと思う。

(川井村北上山地民俗資料館 名誉館長)